

2024. 9. 1. 主日礼拝説教  
聖書：マタイによる福音書13章10～17節  
『癒されることのない者』

「たとえを用いて話す理由」という小標題が揚げられます。1-9節のたとえに続いて、その理由が弟子たちの質問をきっかけにして説明されてゆきます。この伝承はマルコ4;10-12をベースにしています。マルコでは、たとえ話が理解出来ず、イエスに説明を求めています。その結果、イエスに「このたとえが分からないのか」(4;13)と叱責されます。ここにはマルコの弟子の無理解という彼の神学、つまり人間理解が表現されています。しかし、マタイはまったく違う内容の記事に作り替えています。ここでは弟子たちはすでにイエスのたとえを理解しており(11)、イエスは彼らが理解していることを喜び祝福しています。そこで弟子たちが尋ねるのは、なぜイエスがたとえ話という方法を用いるかであって、その内容ではないのです。

たとえ話とは、難しく思える題材を、日常的で平易な素材を用いて語るわけですから、理解出来る者にとっては一層分かり易い語り方です。しかし他方、心を開いていない者にとっては一層分かりにくい語り方なのでしょう。つまり、イエスのたとえ話からは、この二つのグループが生まれるということなのです。マタイは11節で「あなたがた」と「あの人たち」、「悟る」ことが「許されている」と「許されていない」を対比的に並べて、そのことを強調しています。

なぜマタイはこのように二つのグループ化を記す必要があったのでしょうか。そして、悟ることを許されていない「あの人たち」とは一体誰のことを指すのでしょうか。一つには、誕生して間もない初代教会とそれを取り巻くユダヤ教世界との対比が考えられます。14-15節では初代教会が好んで用いたイザヤ6;7を引用してまで13節の「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない」を強調しています。しかし、マタイにおけるユダヤ教攻撃の対象はほぼ一貫して

ファリサイ派や律法学者といった指導者層でした。一般の人々はイエスに従う者として好意的に扱われていることが多いのです。

おそらく「あの人たち」とはマタイが属した教会の人々の質の問題だったのではないかと思われます。マタイによれば、現実の教会は理想的状態どころか、相応しからぬ者が多く混在する集団だったということでしょう。その対処に彼は苦慮しているのです。

マルコはたとえで語る理由を、神が群衆を無理解なまま放置することが目的として記しますが、マタイは違うのです。彼は人々の「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない」といったかたくなさは決して神の目的ではないと語るのです。そのためマルコの提案する無理解な弟子を理解する弟子へと改めたのです。マタイの人間理解とは「悔い改め、いやされる」存在なのだということが逆説的に強調されてゆくのです。

わたしたちは理解出来ない、分からないことに直面すると不安になります。ですから、つい理解していることだけで理解出来ないことまで割り切ってしまうとしてしまいます。そうではないのです。そういう断定や思い込みはマタイにおいては影を潜めます。彼の人間理解、つまり信仰とは「いやされることのない者」を「いやされる者」に変えられることを祈り求める対象として置き換えること、これが福音であると宣言したのです。それが真理に対する姿勢なのでしょう。